きりん

第　2　号

目　次

春日井市　梅ケ坪遺跡採集の石器－第１回……　鈴木秀保　(1)

妙見菩薩雑感……　浜口万里　(6)

名古屋の焼物……　荒木　実　(10)

犬山市羽黒出土の古瓦について……　坂野建三　丸山竜平　(13)

最近の考古学発掘調査の成果（上）……　近藤宗光　(18)

１９９８

荒木集成館友の会

春日井市　梅ケ坪遺跡採集の石器…第1回…

鈴木　秀保

[1] はじめに

松原昭三氏によって1963年（昭和38年）頃に発見され、当時　名古屋大学考古学研究室にいた安達厚三氏（現在　名古屋市博物館副館長）が着目し、同大学の澄田正一教授（当時）が「先土器時代の貴重な遺跡である」とし梅ケ坪遺跡と命名された（文献１）。尾張地方でも犬山市・入鹿池遺跡群と並んで旧石器時代最終末⇨縄文時代草創期にかけての学史に残る遺跡にもかかわらず春日井市教育委員会の無能、怠慢により未発掘で十分な調査もされず宅地や駐車場などになり滅失した（文献２・註１）。

同遺跡が発見された時筆者は中学生であり、数回にわたり遺物を表面採集をし、尖頭器・有舌尖頭器・掻器・剝片など約 200点を保管している。一部の研究者の間では梅ケ坪遺跡についての概略はしられ（註２）、春日井市も筆者が上八田遺跡を発見するまで実体もしらぬまま市内で最も古い遺跡として学校で教えている（文献３・註３）。採集された遺物は発表されておらず春日井市民はもとより．"幻の遺跡"となっている為、今回はその一部を紹介することにした。頁の関係で今回は「遺跡の概要（位置と環境）」までとし、次回に採集した「遺物について」、および「まとめ」を述べたい。

[2] 遺跡の概要（位置と環境）

春日井市域には北部の丘陵地帯、南や西南部にかけて洪積段丘面が発達しており庄内川の沖積地にあたる現在の氾濫原にいたる間に３段の段丘面が認められ、そのうちの小牧面段丘に本遺跡は立地していた。付近の地形を概観すると南に低位置（鳥居松面）が北に中位置（小牧面）があり、遺跡は小牧面上に位置している（図１・２）。

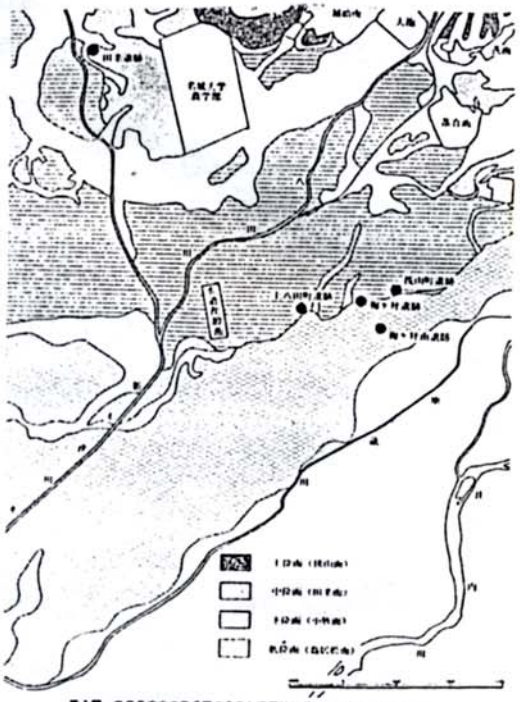
鳥居松面は更に庄内川による開折扇状地へと連なっており、北東に向かって洪積台地は高さをまし段丘地形を形成し、北東の山地へと延びている。この段丘地形は上位より田楽面・小牧面・鳥居松面の３つの段丘面に分かれ、それぞれ木曽川の河岸段丘のうち高位段丘・中位段丘・低位段丘の高位面に対比されている（図３・文献４）。小牧面はチャート礫を主とする礫層とそれを覆うシルト層または砂層から構成されており、遺物の採集地点ではシルト層が削られ礫層が露出した状態になっていた。つまり、旧石器時代の包含層は攪乱され、地表に露出していて数センチの場所もあったと言われている（註４）。この為に一度も試掘されることもなく、遺物が2500点以上表面採集されている。

遺跡はＪＲ春日井駅の北約１キロ、現在では出雲殿～吉田医院～喫茶木の葉にかけての南西にかけての緩やかに傾斜する海抜26mの小牧面の舌状台地に位置した。地籍は春日井市梅ケ坪町であった（註５）。

春日井市教育委員会の不手際と黙殺により宅地化と国道19号線バイパス建設などの原因の為に試掘をされることもなく最後の残存地の畑も駐車場となり完全に滅失した。

尚、その周辺から筆者によって1990年に発見された旧石器時代の遺跡として上八田遺跡・浅山町遺跡・梅ケ坪南遺跡（註６）が確認されている。

第１図　遺跡の位置及び周辺の旧石器時代遺跡



第２図　春日井市内の海岸線の今昔と旧石器時代～縄文草創期の遺跡
（土地条件図（国土地理院・昭和49年発行）から作成）

第１図・第２図　文献７より引用

（註１）梅ケ坪町72・73・76は滅失扱いをされていたが1989年６月頃までは包含層は攪乱されていたが残存していた（写真１）。現在の出雲殿の駐車場となっている。この地点の土は穴橋町１丁目（地主談）と、水道沈殿池の近隣に運ばれており剝片・砕片を採集している（1990年５～11月）が客土であるので注意すべきである。

（註２）例えば、文献５によると「本誌（春日井市史・資料編３）には、尖頭器・剝片の図が５点掲載されているだけであるが梅ケ坪遺跡からは、多量の資料が採集されており筆者らが確認しているだけでも尖頭器、有舌尖頭器、ナイフ形石器、先刃掻器などの石器がある。」と記されているように県下の研究者（安達厚三・川合剛・故大参義一・加藤安信

・澄田正一・岩野見司などの各氏）は大半が松原昭三宅を訪ねている（尚、文献６・19を参照のこと）。

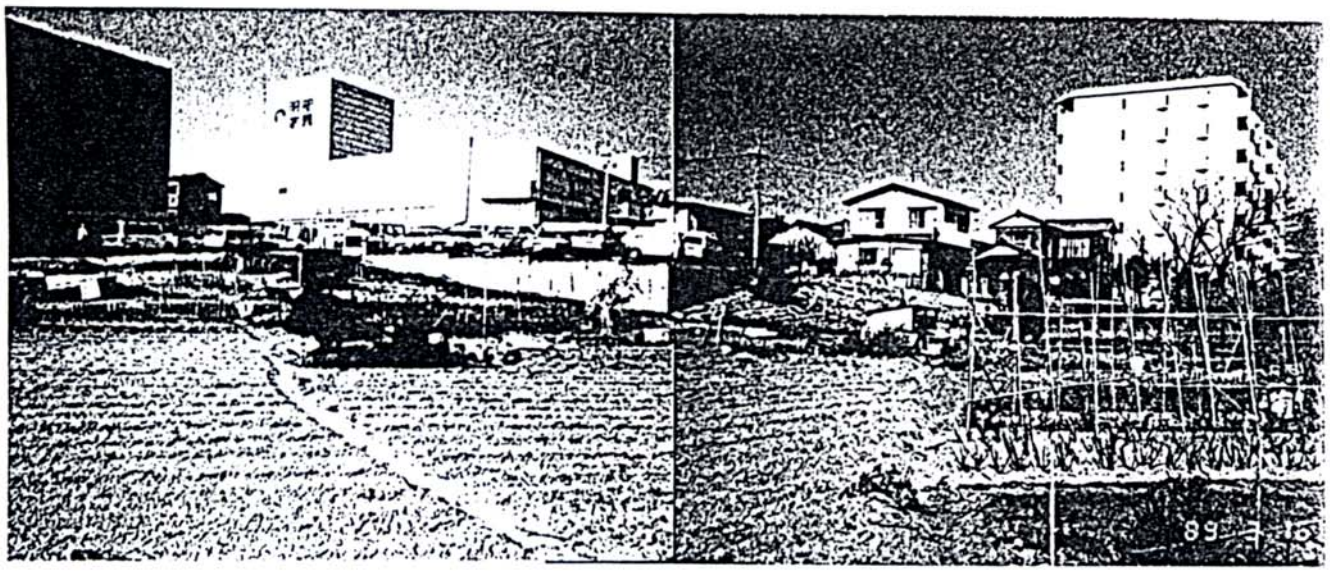


写真１　梅ケ坪遺跡の最後の残存地（1989.3.16）

（註３）春日井市で一番古い遺跡として学校で教えられているが副読本として使用されている文献３は教材として不適切である洞窟の前のイラストに「この頃の人々はほら穴に住み…」（P13）、「やがて何千年、何万年という…」というような旧石器時代の生活と環境についての理解を全く欠いている（詳細については鈴木忠司氏の著作等を読まれたい）。また、春日井市内において、現在分かっている最も古い遺跡は筆者が1990年７月12日に発見した上八田遺跡である。単なる石器採集ではなく最初から旧石器時代の新しい遺跡探索という明確な目的をもったものであったことを明記しておきたい。（文献７・20）

（註４）松原昭三氏および安達厚三氏のご教示による。安達氏の教示は1967年名古屋大学考古学研究室の調査に基ずく発言と思われる。

（註５）遺跡の所在地は梅ケ坪町　70－10・11・14・76（文献８）と梅ケ坪町　72－76（文献９）と食い違いがある。遺物の散布地点がかなり広範囲にわたっていたと考えればよく余りこだわる必要はないと考える。製品、剥片、砕片、の集中地点が３ケ所あり、石器製作がこの地でなされ、狩猟の場でもあり、捕らえた動物の解体作業がなされたと推定されている。春日井市民族歴史資料館のパネルには遺跡はことぶき町～梅ケ坪町～浅山町一帯という表記がされているが、なんら正確な遺跡分布調査されたものではなく漠然とした表現にすぎない。

尚、紅村弘氏は「この地域の一部には広い段丘地形もみられ、特に庄内川流域では先縄文の存在が予想されるので今後の調査に多くの期待がもたれる」（文献10）と新遺跡の発見を予見されていた。

（註６）筆者によって1990年７月12日に発見された梅ケ坪南遺跡（地積…浅山町１丁目1310－109，782 ㎡・地主　長谷川強氏）は、春日井市教育委員会によれば（文献11およびそれに基ずく文献９）梅ケ坪遺跡の一地点として取り扱われている（電話にて照会済）。確かに梅ケ坪遺跡の南約200mにあり梅ケ坪遺跡の一地点としたのが良いかもしれないが、もはや滅失扱いとして取り扱っている以上、別の遺跡とするか、畑地として一部残存と変更するのかどちらかである。文献７・12・13では別の遺跡として扱っている。この地域も１丁目1310－110 は大駐車場に化した。採集遺物から一言コメントすると梅ケ坪遺跡では尖頭器・有舌尖頭器・先刃掻器・剝片等でナイフ形石器は１点であった。梅ケ坪南遺跡では尖頭器・有舌尖頭器は皆無で、ナイフ形石器５点・石核・縦長剝片・剝片であり石器製作の際に生じる砕片は皆無であった。時代差を示しているのかも知れない。

尚、文献11について触れておく。篠木町８丁目から数10年前に大野美吉氏によって有舌尖頭器（柳葉型）１点等が採集された地点を穴橋町１丁目の篠木遺跡に強引に組込み、有舌尖頭器を旧石器時代のものとして取り扱っている。筆者は文献12で川合剛氏が述べられているとおり、有舌尖頭器を縄文時代の遺物として考えている（文献14）。名古屋市天白区・北沢遺跡の「有舌尖頭器」について久野敏幸・増子康真の両氏は縄文時代草創期として論じている（文献15）。筆者も３点採集しているが、縄文時代晩期の石ぞくと考えている。北沢遺跡の資料の評価には明確な包含層の確認を待たねばならない。文献12－A18の所在地が梅ケ坪町となっているが、浅山町１丁目であるので訂正しておきたい。ついでに、文献７の「本（上八田）遺跡は昭和55年ごろ……梅ケ坪遺跡周辺の採集に当たっていた…」。

文献

1　中日新聞　1965年（S40）７月24日　朝刊

2　中日新聞　1989年６月15日　朝刊（近郊版）

3　『春日井の歴史物語』1986年　春日井市郷土史研究会

4　井関弘太郎　1980「地形・地質・地盤の概要」『愛知県の地質・地盤（その１）』愛知県

5　川合剛・安達厚三　1981　「愛知の旧石器資料（２）小牧市総濠遺跡採集のナイフ形石器」『名古屋市博物館研究紀要』第４巻　名古屋市博物館
6　安達厚三　1975「萩平」『日本の旧石器文化　第２巻』　雄山閣
7　安達厚三・川合剛　1992　「愛知の旧石器資料（５）春日井市上八田町遺跡採集の旧石器」『名古屋市博物館研究紀要』第15巻　名古屋市博物館
8　加藤安信　1984　「愛知県先土器時代出土地一覧」『愛知県重要遺跡指定促進調査報告』　愛知県教育委員会
9　『愛知県遺跡地図（１）尾張地区』　1986　愛知県教育委員会
『愛知県遺跡地図（１）尾張地区』　1994　愛知県教育委員会
10　紅村弘　1984　『東海の先史遺跡』　総括編・復刻版
11　『春日井市遺跡分布図』　1993　春日井市教育委員会
12　川合剛　1996　「愛知の旧石器資料（６）愛知県旧石器出土地名表」
『名古屋市博物館研究紀要』第19巻　名古屋市博物館
13　岩野見司・赤塚次郎　1995　『日本の古代遺跡　48　愛知』　保育社
14　岡村道雄　1990　『日本旧石器時代史』　考古学選書 33　雄山閣
15　久野敏幸・増子康真・荒川弘道　1987　「東海地方有舌尖頭器石器群の編年－名古屋市北沢遺跡をもとに－」『古代人』48　名古屋考古学会
16　川合剛・安達厚三　1982　「愛知の旧石器資料（３）　岡崎市五本松遺跡採集のナイフ形石器」　『名古屋市博物館研究紀要』第５巻　名古屋市博物館
17　宮川芳照　1973　「第一節　先土器時代」『大口町史』　大口町
18　宮川芳照　1973　『春日井市史・資料篇３』　春日井市
⇨『春日井市史　復刻版』1973年３月31日奥付の楢崎彰一執筆には梅ケ坪遺跡についての記述はない。
19　名古屋市博物館常設展示・尾張の歴史・展示解説１　旧石器～古墳』
（改訂版）1983　名古屋市博物館
20　川合剛　1997　「旧石器時代」『名古屋市史（第一巻）』　名古屋市

妙見菩薩雑感

浜口　万里

小牧市の桃花台に住むようになり、内津妙見にお参りする機会に恵まれ、妙見さまの星の印に興味を持ち調べてみました。

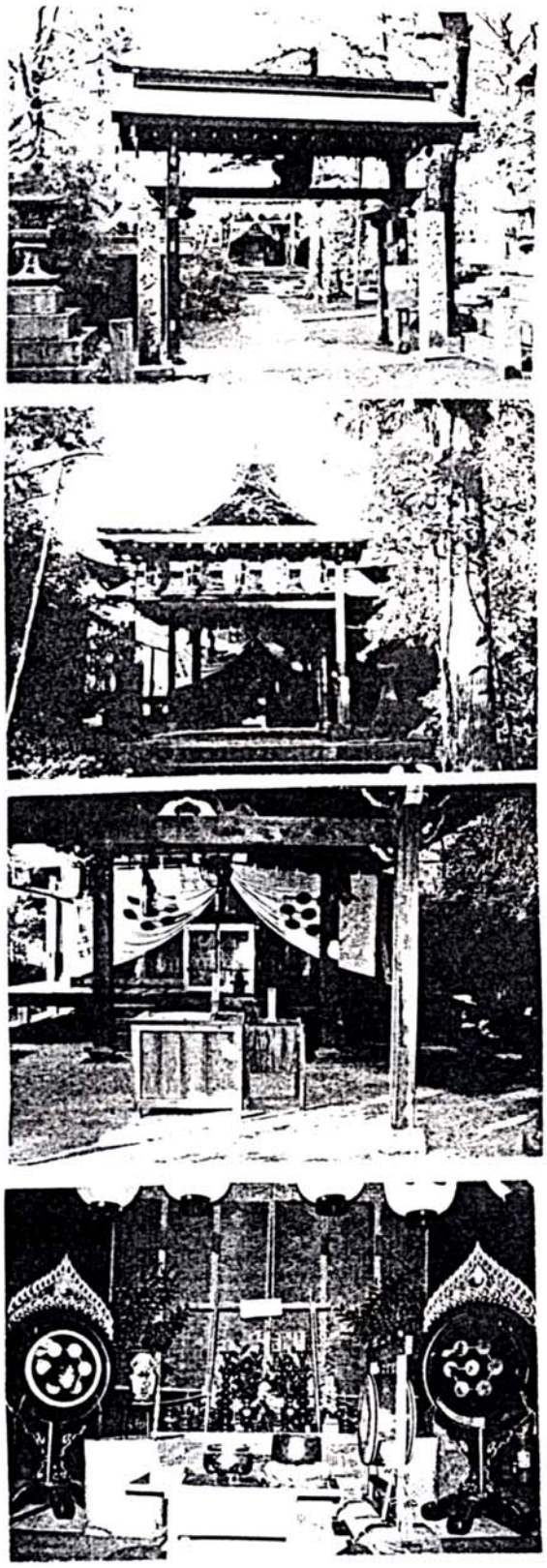
《北辰・北斗信仰が一体化した妙見信仰：北辰（北極星）と北斗（北斗七星）への信仰はインドや中国においても古い歴史がある。北辰信仰と北斗信仰はほんらい別のものであったが、いつのころからか、混同されるようになり、それが、そのまま日本に伝えられた。

仏教において北辰は、妙見菩薩と呼ばれ、国土を守り、苦悩を除き、願いをかなえさせる功徳があるとして尊ばれた。

中国においても北辰は、北の空に位置を変ることなくかがやいていることから、古来星の中でもっとも重要な、天帝太一神であると考えられ、道教では星をつかさどる神とし重んじられた。

北辰と同じ北の空にひしゃく状にならぶ北斗は、天帝の乗り物で人間の生死や禍福を支配すると考えられ、その七星のひとつ破軍星は、敵の軍をうち破る力をもつとして、のちに日本においてはとりわけ武士の間に信仰がひろまり、弓矢の神としてあがめられた。

北辰と北斗の信仰をあわせた妙見を祀る寺社は日本に多いが、その中でも著名な「能勢妙見」（大阪府豊能郡能勢町）は、かってこのあたりを支配していた、清和源氏の流れを



内津妙見

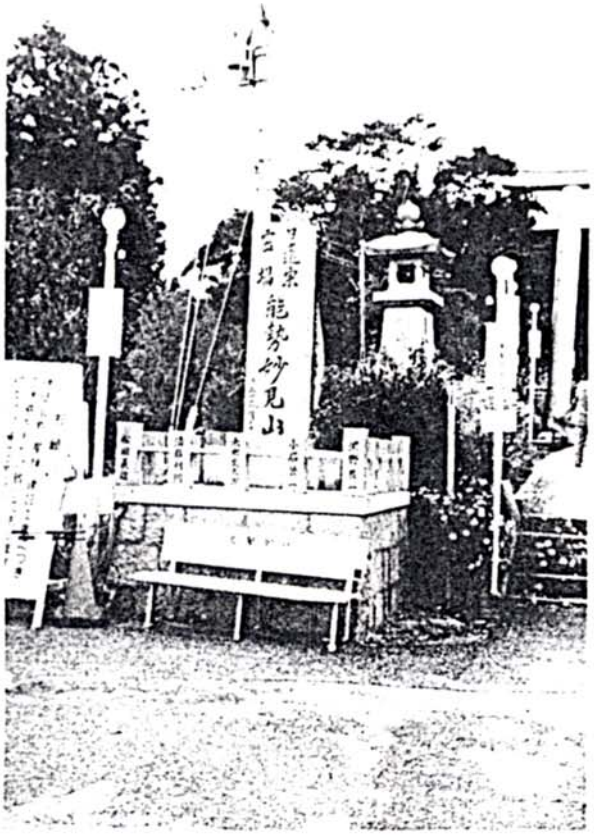
くみ、源頼朝の遠い先祖にあたる多田（能勢）氏一族が祀っていた鎮宅霊符神に由来する。鎮宅とは、家に邪鬼が侵入することを防ぐ道教の呪術、霊符とは道教の護符すなわち「おふだ」で、鎮宅霊符神とは道教の家内安全、除災招福の神である。それがのちに日蓮宗に改宗し、霊符も妙見大士に改められたものである。

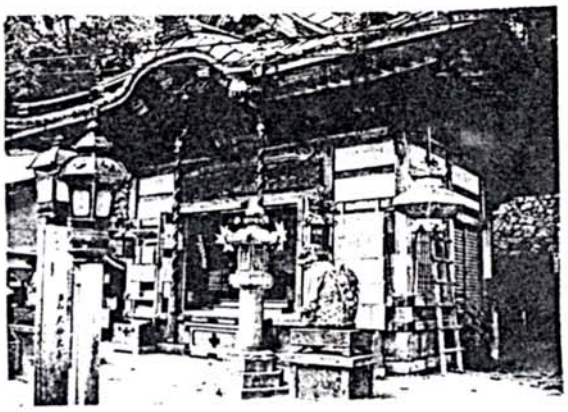
妙見社に日蓮宗に所属するものが多いのは、日蓮が北辰の守護を得たとして日蓮宗では、鎮守として祀るからで、天台宗においても妙見菩薩を祀るが、それは法華経信仰との関係による。》＊1 とのことでした。

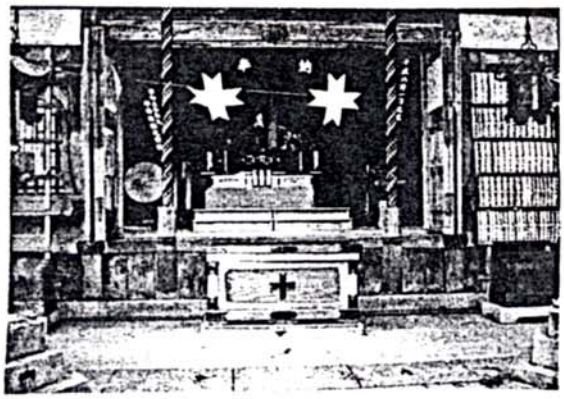
それで、「能勢妙見」にお参りに行きました。ここは、やはり今は日蓮宗の名刹でした。

その後、京都に行きました折りに、西大谷本廟のわきの道を清水寺へと登る坂道の途中に妙見堂があったので、「こんなところにも妙見堂が」と立ち寄り、写真を撮りました。そして、「何故この場所に妙見堂が？」との疑問がわき、色々な本を読んでいくなかに、《…その最も具体的な例は、西暦３世紀に漢訳された『無量寿経』、これは後の浄土経、とくに浄土真宗の根本教典でありますが、この中に仏教の極楽浄土を「安楽国土」という言葉で表現しています。》＊2 と書かれていたことから、この場所に妙見堂があることが納得できました。

さらに、ここには馬の絵馬が多く奉納され、お堂の正面の鳥居には、馬が刻まれているの







能勢妙見

です。

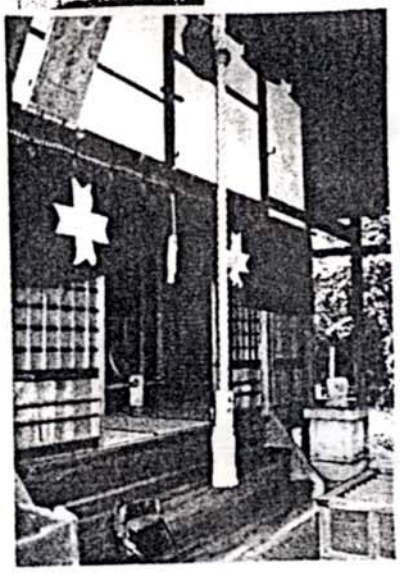
この事は、何を意味しているのでしょうか。《不動の北極星が中心となる北天を、宇宙の中央・太極とする中国哲学…太極は「子」によって象徴される。…「子」を時間に執って月に宛てればそれは冬至を含む旧１１月で、『易』によれば、それは一陽来復の象、つまり陰の気がきわまって、ここにはじめて一陽の萌す時である。

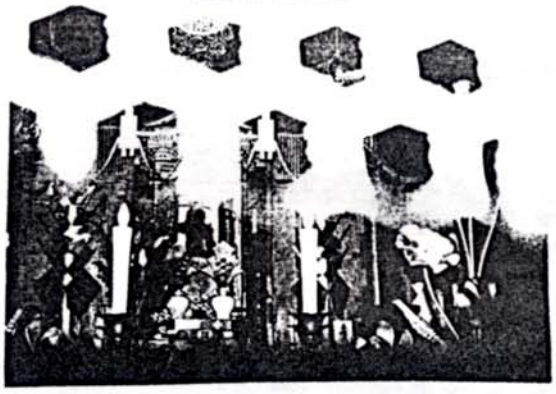
「午」はそれに対して夏至を含む旧５月、陽気がきわまって一陰のはじめて萌す時である。子→午は無から有の軌（みち）、午→子は有から無への軌をしめす。万象はこの軌道に乗ることによって、はじめて輪廻転生永遠性を保証される。》＊3 との文を読み、妙見堂を太極として馬の刻まれた鳥居とを結ぶ参道には、このような意味があるのだろうかと考えたり《武士の間に信仰がひろまり、弓矢の神としてあがめられた》とのことですから、ただ単に、それだけのことかと考えたりしました。

いずれにしましても、妙見様の星の印にひかれて調べはじめたところ、日本の文化が、いかに深く中国の道教の影響を受けているかを知り、あらためて道教の勉強を始めようと決心しました。道教をキーワードにすれば、弥生時代以降の様々な謎のほとんどが解けそうな気さえします。

博識な皆様のご教示をお待ちしております。

京都の妙見

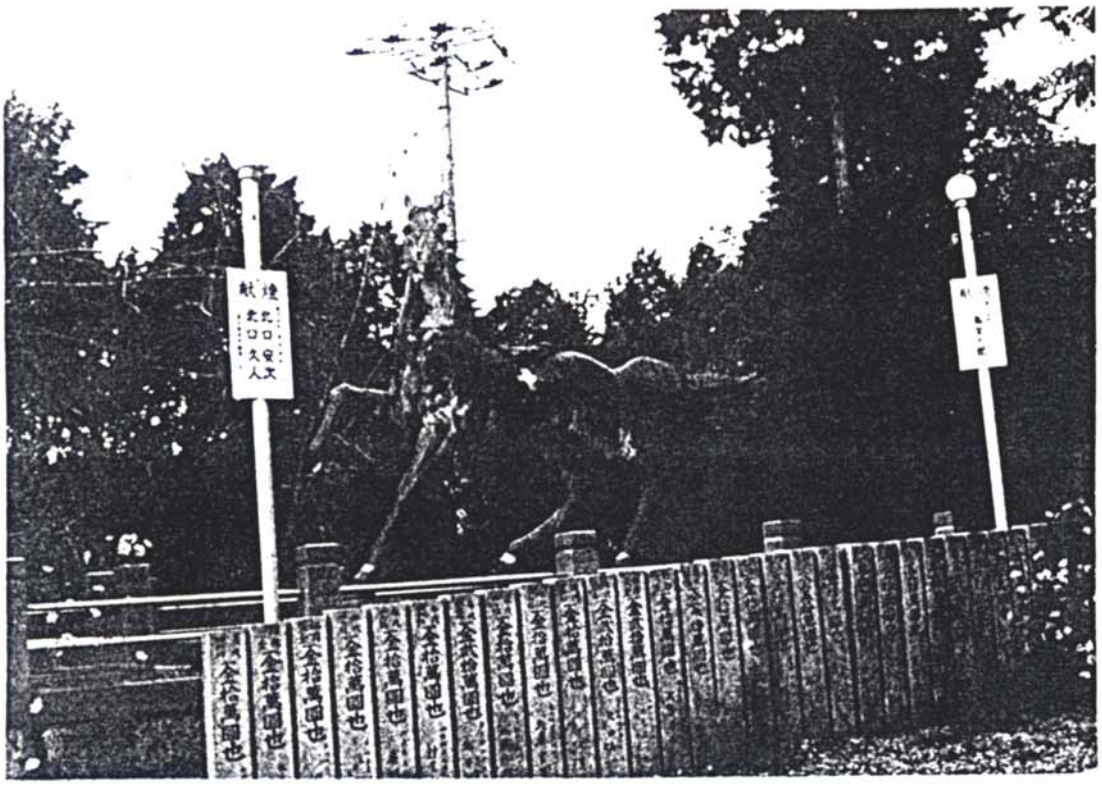




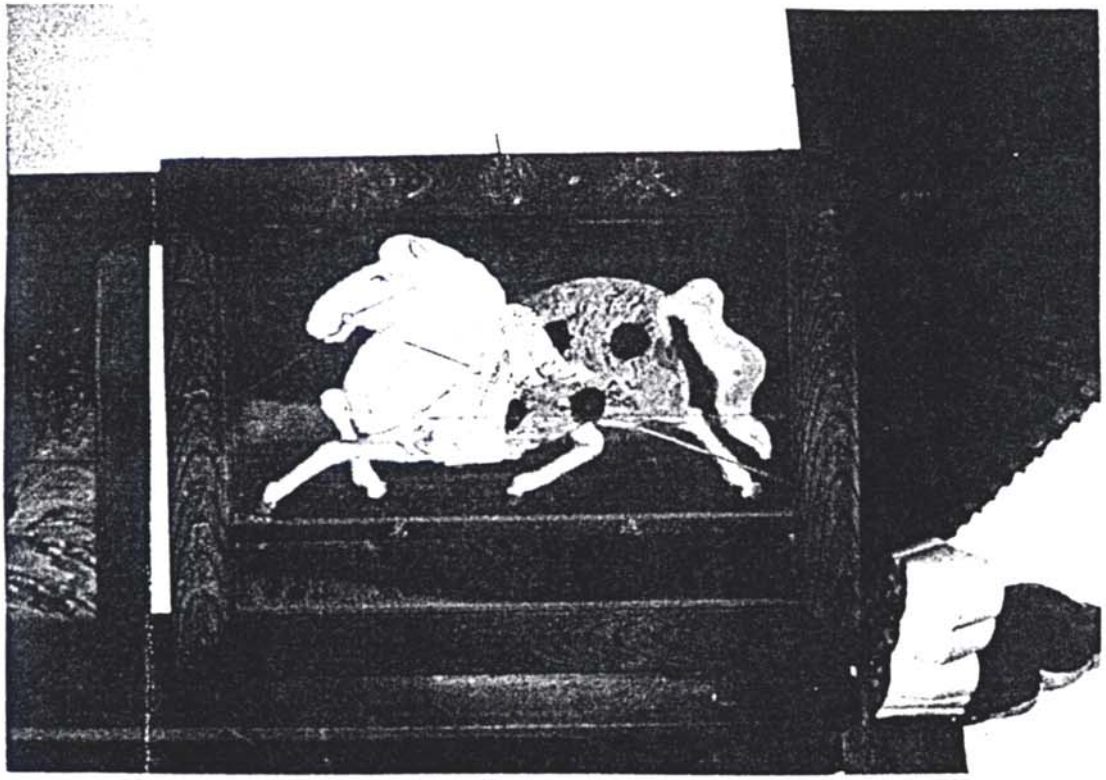
＊1 「道教」の大事典　新人物往来社

＊2 「道教と日本文化」
福永　光司著　　人文書院

＊3 「隠された神々」
吉野　裕子著　　講談社現代親書



能勢妙見の馬



妙見堂の絵馬

名古屋の焼物

荒木　実

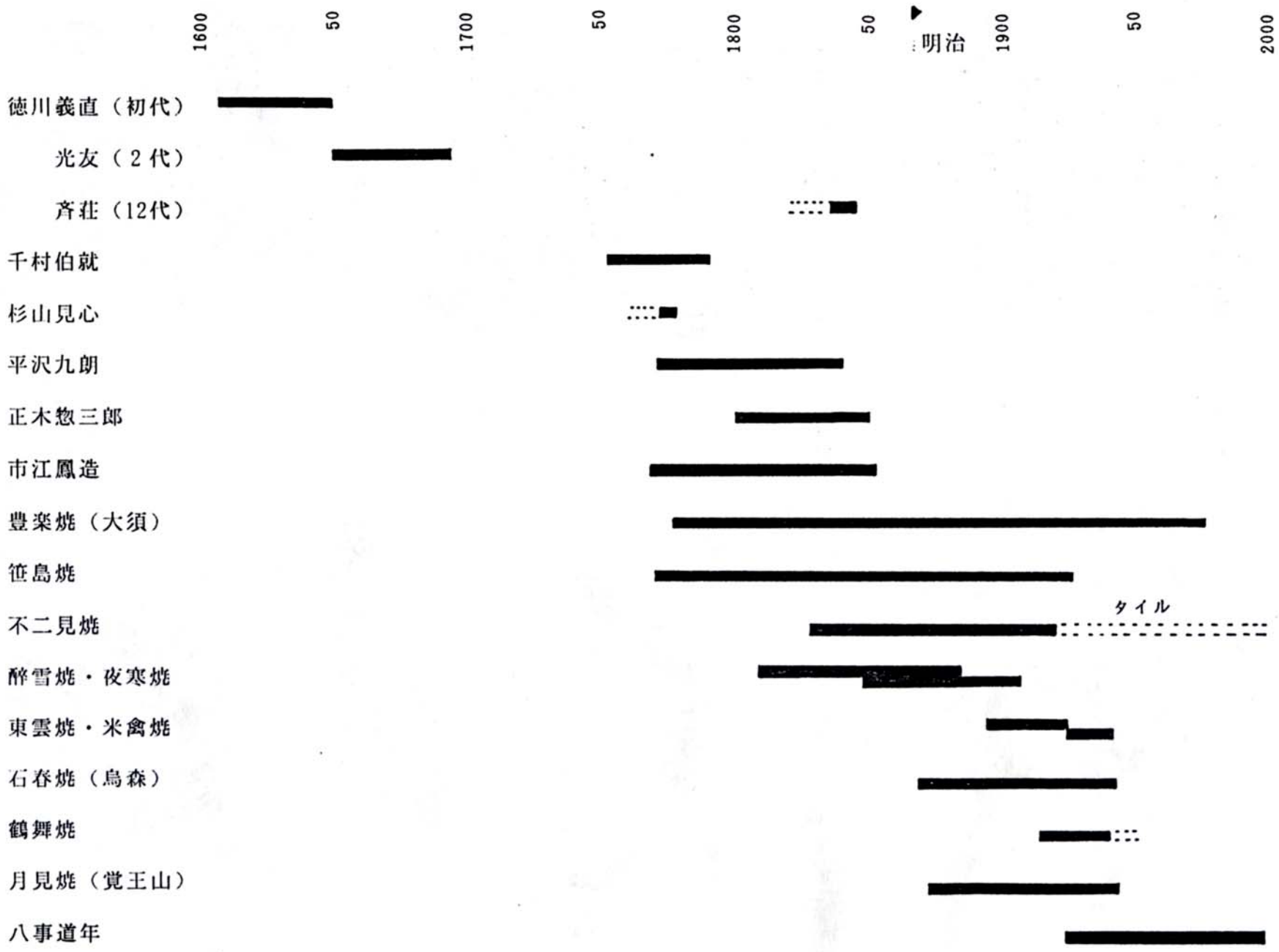
江戸時代から現代までを通して、名古屋城内及び城下町における、お抹茶の文化が町内に連綿として続いている。そうした歴史をひもといてゆくことも大切なことである。名古屋において焼物が隆盛であった時を三つの山と見ることができる。

最初は藩祖義直公が瀬戸の陶工の離散していたのを取戻して復興に心掛たことによる。二代光友公も意をつがれ、名古屋としては城内の御深井（おふけ）丸に窯を築いて瀬戸の陶工達を中心として、御深井焼を製作された。光友公の大花瓶や陳元贅の安南写の作品も今に残っている。

二つめの山としては十二代斉荘（なりたか）公の治世である。この殿様はよほど焼物が好きであったかを示す。萩山焼は御深井丸で焼かれた楽焼窯であり。東山焼は東区葵町にあった下屋敷での楽焼窯である。更に参勤交代で江戸に滞在中にも戸山の藩邸で楽々園焼を作製する等の熱心で斉荘公手造り茶碗等が数個は現在も残されている。そうして殿様を中心として、お家来衆も多数輩出したが特に作品を残している者に、千村伯就、杉山見心平沢九朗、正木惣三郎、市江鳳造等が見られる。城中が盛んになると家来から町家へと広がってくる。商家として発展したものは、豊楽焼で三代豊助の頃に中区大須の万松寺内隠里（かくれさと）に豊楽窯を営んでおり、斉荘公より「豊楽」の額を賜った。笹島焼の牧朴斎は名工として萩山焼にも召されて奉仕している。不二見焼は鳳造の娘婿村瀬美香を祖として明治に不二見町より大池町に、四代四郎で御器所に移転してタイル屋となり現代に続いている。

三つめの山は江戸時代終末期には趣味でやっていた人も武家商法の一棒を担うことになる。そして明治・大正・昭和初期までは古い形のまゝの焼物屋さんは続いてゆく、名古屋の中心地はお城から大須まで位と考えられ、外は郊外として窯の煙を上げていた。大須の豊楽焼、不二見焼、酔雪焼・夜寒焼の辻二代、東雲焼・米禽焼の二代、笹島焼、石春焼（烏森）鶴舞焼、月見焼（覚王山）八事道年。

名古屋の焼物は戦後どうなってしまったのであろうか、日本陶器、鳴海製陶、不二見タイルなど消えてはいないが、大工場化して総てが機械的に生産され、出来上がった製品は誠に綺麗であり、形も満点であるが、手造りの面白さは見えない、江戸、明治、大正時代に後戻りすることはないであろうか、街が大都会に移り変わって行くように。

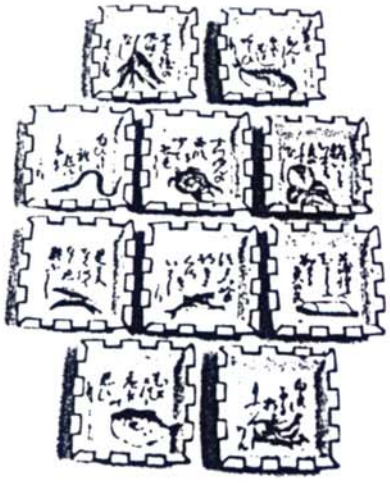

1600
50
1700
50
1800
50
明治
1900
50
2000
徳川義直（初代）
光友（２代）
斉荘（12代）
千村伯就
杉山見心
平沢九朗
正木惣三郎
市江鳳造
豊楽焼（大須）
笹島焼
不二見焼
タイル
醉雪焼・夜寒焼
東雲焼・米禽焼
石春焼（烏森）
鶴舞焼
月見焼（覚王山）
八事道年

御深井焼　三島写筒茶碗　深井製印

正木焼　黄瀬戸釉宝船香合　正木横印

豊楽焼　木具写蒔絵鯛形菓子器　豊ホ印

不二見焼（三代）籠編菓子器　不二印



笹島焼　川柳絵手塩皿 10 笹島印

鶴舞焼　印度古代式香炉　山古印

犬山市羽黒出土の古瓦について

坂野建三　丸山竜平

1．はじめに

一昨年のことかと思う。突然、犬山市羽黒字神明８４在住の坂野健三氏から、貴方は鉄を研究されているようだが、羽黒にも鋳物師がいて、遺物もあるので現地を案内するので、尋ねてくるよう、との誘いがあった。

腰の重い私が、坂野氏のお住まいを尋ねたのは、大学へお邪魔したいのだが、病気で思うように動けないとのお話があったからである。

拝見した鋳物関係の遺物には、興味をそそる鋳型に関連するかと思われる土製品があったが、他に私の関心を引いたのは、二点の瓦片であった。明かに白鳳期に遡る叩きを施していた。お話を聞くと、地元の人が採集したもので、羽黒の大通りの東側付近であろう、とのことであった。この瓦が地元で採集できるとすれば、白鳳時代に遡る寺院から官衙・役所の存在は間違いないので、採集地点を確認するようにお願いしてお暇した。

瓦採集地点は、坂野氏のお宅の直ぐ近くであるし、先に案内していただいた羽黒城跡を再度踏査しておきたかったので、再び現地へ赴いた。この折り、羽黒城跡の竹藪に隣接した東側の荒地で一点と竹藪の南東の畑で一点の布目瓦を採集した。もうこれでこの地点が古瓦散布地として周知の遺跡に加えて間違いないとの確証を得た。もちろんここでは古瓦以外にも多数の中世の陶磁器などが散布しており、古代から継続する遺跡としても間違いないものと想定した。あるいは、現地に残る井戸も、河原石を積み上げたものであるが、中世・すくなくとも戦国期までは遡るものと思えるものであった。

この後、さらに坂野氏は奥様とともにその不自由な身体を押して、寒い中での踏査を繰り返し、今や総数十数点に上る古瓦を採集されている。その熱意に敬服する他無いが、ここではその坂野氏の学恩に応えて、その古瓦を二三紹介し、この遺跡、遺物が世に出て、坂野氏の労が少しでも報いられることを切に願う次第である。

2．採集された古瓦

ここでは坂野氏所有古瓦のうち、平瓦６点を観察した。丸瓦や私が採集した分に関してはまた機会をみて紹介したい。

（1）平瓦で、残存の大きさ7．8×8．5ｃｍ、厚み1．6～2．0ｃｍを測る、狭端部の破片である。凸面・裏面に斜格子目の叩きが窺われ、凹面・表面には布目が認められる。斜格子目は正確に大きさが出せないが、小振りである。布目の本数は明確ではない。製作は一枚作りかと思われる。胎土は水簸した良質のものを用いるが、微少のチャート、長石を含んでいる。瓦に「日本紙工［］」（［］は「北」カ）と記載を見る。

（2）平瓦で、残存の大きさ8．0×6．0ｃｍ、厚み2，0×1．7ｃｍを測る、狭端部の破片である。凸面・裏面に縄目の叩きが窺われ、凹面・表面には布目が認められる。縄目の叩きは3ｃｍ幅で11条認められた。布目は、経、緯それぞれ6×6本からなる。製作は一枚作りかと思われる。胎土は水簸した良質のものを用いるが、多量のくさり礫が混入し、ほかにチャート、長石、石英を僅かに混入している。このくさり礫のせいか、瓦の色調は、表面、断面ともに変わらず、「薄色」（うすい紫みの赤）（『色の手帳』昭和61年　小学館）を呈し、ややその赤みが濃い。瓦に「日本紙工北」と記載を見る。

（3）平瓦で、7．0×13．0ｃｍ、厚み2．7ｃｍを測る破片である。凸面・裏面に縄目の叩きが窺われ、凹面・表面には布目が認められる。縄目の叩きは3ｃｍ幅で8条認められた。布目の経糸、緯糸の数は明確ではない。製作は桶巻き作りと思われる、幅3．5ｃｍの模骨の痕跡がある。胎土は水簸した良質の粘土を用いるが、チャートの砂粒を若干含む。瓦の色調は、断面が「生壁色」（灰黄色）で、やや白味の濃いものである。器面は黒味を帯びた「うつぶしいろ（灰黄）」である。瓦の採集地の記載はない。

（4）平瓦で、残存の大きさ13．5×9．5ｃｍ、厚み2．8ｃｍを測る、端部片である。凸面・裏面には縄目の叩きが施され、凹面・表面には布目が残りる。縄目の叩きは、幅3ｃｍで11条認められ、布目は経、緯、11×8本が観察される。製作は一枚つくりである。凸面・裏面には砂粒が多数付着しており、器面に振り掛けたものと見受けられる。砂は長石の多いものである。しかし、凹面にはその痕跡はない。胎土は水簸した良質の粘土を使用するが、長石などの砂粒を少量含む。瓦の色調は、断面が「生壁色」で瓦（3）と酷似する。器面も（3）と酷似し、黒味を帯びた「うつぶしいろ（灰黄）」である。出土地は「するすみのヤブ」と記されている。

（5）平瓦で、残存の大きさ8．5×6．5ｃｍ、厚み2．6ｃｍを測る、小片である。凸面・裏面には縄目の叩きが認められ、凹面・表面には風化して見過ごしかねない布目痕がある。縄目は3ｃｍ幅で11条である。布目の経緯の本数は明確ではない。製作は一枚作りかと思われる。凸面・裏面には細砂粒が撒かれたものと見受けられる。この現象は瓦

（4）と酷似するが、長石の他に石英も目に付く砂である。凹面にはこれと同じ明確な痕跡はないが、石英を主に少々砂粒が目に付く。胎土は水簸した良質の粘土を使用しているが、断面にチャート粒が二三観察される。瓦の胎土の色調は、「生成」（黄みの白）の黄を少し濃くしたものであるが、器面は「空五倍子色・うつぶしいろ」（灰黄）に黒味を加えた様相である。出土地は、断面に赤鉛筆で「城やしきやぶ」とかろうじて判読できる。

（6）平瓦で、残存の大きさ１０．０×３．５ｃｍ、厚み３．０×３．１ｃｍを測る、小片であるが、側縁部である。凸面・裏面には縄目の叩きが認められ、凹面・表面には布目の痕跡が残る。縄目は、３ｃｍ幅で９条ある。布目は、経糸６本が観察できる。製作は一枚つくりであろう。凸面・裏面には長石、石英の目立つ細砂粒が撒かれたようである。凹面・表面にも同様な細砂粒が部分的に観察し得る。胎土は水簸した良質の粘土を使用しているが、大粒のチャートが認められ、長石の砂粒が少量含まれている。色調は、一方の断面中心部が「生壁色」（灰黄色）で、先の資料（３）（４）と酷似するが、他面は赤味の強い灰黄色である。外縁は「銀鼠・ぎんねず・ぎんねずみ」（灰色）である。なお一部鉄分の付着が認められる。

３．若干の編的年検討

資料（１）は、格子の叩きを施し、その格子が斜めで、小さいことから、平安時代のものと誤認する恐れもあるが、全体的な様相から一般的には、白鳳時代・７世紀後半もしくは末と考えられる。これをＩ期としてこの建物の創建期と一応しておきたい。他方資料（２）は、縄目の痕跡の弱いもので、他の縄目瓦４点とは色調、胎土、焼成などで様相が異なる。厚みが薄い点では資料（１）に類似し、ここでは資料（１）と資料（２）を近接する時期として前者をＩ期の１、後者をＩ期の２として、８世紀初頭前後に想定しておきたい。

資料（３）～資料（６）は厚みも分厚く、奈良末から平安時代にかけてのものであるが、資料（４）～（６）の３点は、凸面に細砂粒を用いている。ところが資料（６）は、この細砂粒が凹面にも認められる。これらの点を総合すると、資料（６）は、資料（４）（５）に後続するものとしてよかろう。つまり、資料（３）はⅡ期、奈良末から平安初期に相当し、資料（４）（５）はⅢ期となり、平安前期ごろに該当する。また、資料（６）はⅣ期となって、平安時代中期ごろに想定できることになる。

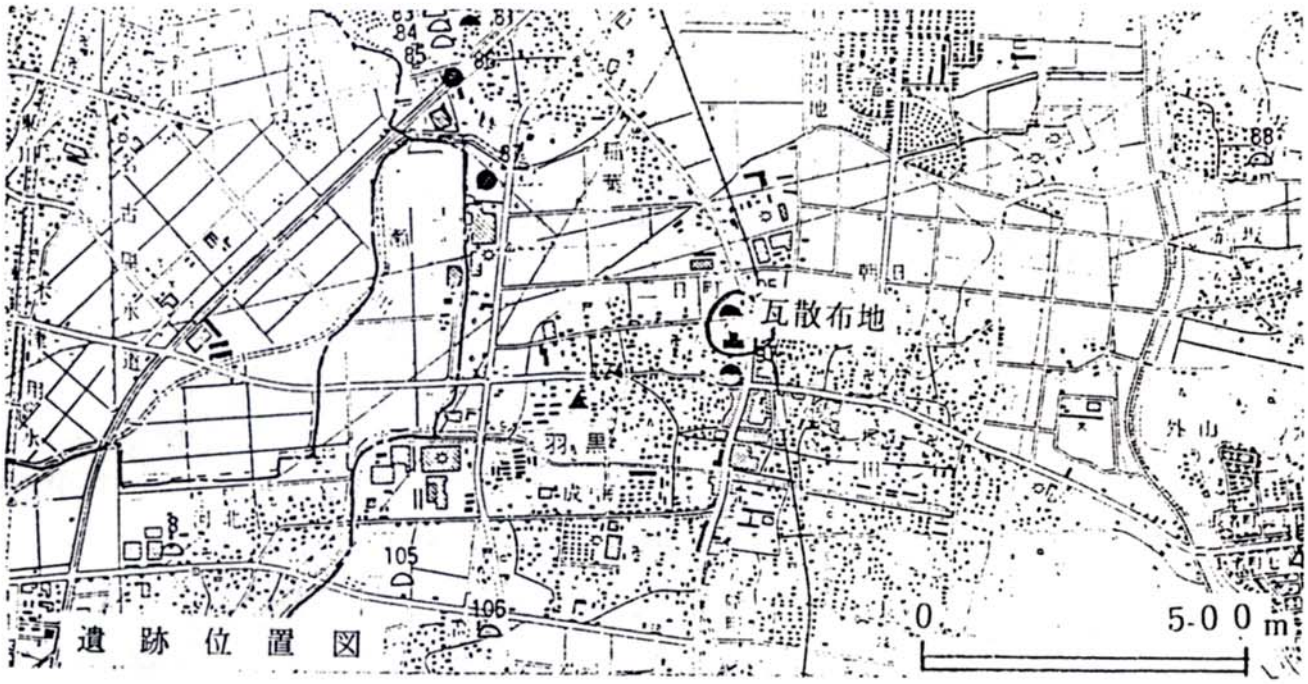
以上を整理するとＩ期の１（資料１・斜格子叩き目・薄器壁・胎土色調Ａ）・Ｉ期の２

（資料２・縄目叩き・薄器壁・胎土色調Ｂ）－Ⅱ期（資料３・縄目叩き・厚器壁・胎土色調Ｃ）－Ⅲ期（資料４・５・縄目叩き・片面細砂粒・厚器壁・胎土色調Ｃ）－Ⅳ期（資料６・縄目叩き・両面細砂粒・厚器壁・胎土色調Ｃ）である。

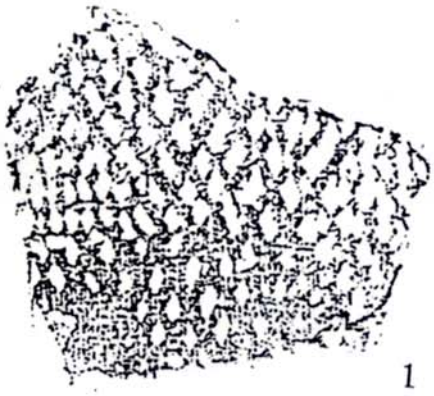
４．むすびにかえて

『愛知県遺跡地図（Ｉ）尾張地区』（１９９４年）愛知県教育委員会発行によると、古瓦散布地となる羽黒字城屋敷には、羽黒城跡と羽黒城古墳（前方後円墳）が記載を見る。また、近隣で古瓦の散布地を求めると、至近距離となる羽黒字金山にて富士１号古窯の指摘があり、平安時代の瓦の出土のあったことを記載する。

しかし、奈良や白鳳時代に遡る遺跡・散布地、おそらく寺院もしくは官衙の存在を示唆する記載はない。このことから、当遺物は、この地点に瓦葺き建物が白鳳期から平安時代中頃にかけて存在したことを初めて周知させたものであって、坂野氏の熱意に敬意を表するとともに、この遺跡が早く日の目を見ることを願って筆をおきたい。　（文責・丸山）



遺跡位置図


1

2

4

3

5

0 10cm

最近の考古学発掘調査の成果（上）

—縄文時代・弥生時代・古墳時代・飛鳥時代—

近　藤　宗　光

弥生時代の吉野ヶ里遺跡の発掘調査によって、この時代には大集落が存在し、『魏志』倭人伝に記述されている卑弥呼の邪馬台国は、北九州に存在したのではないかと北九州・畿内説論争に火をつけた。また高松塚古墳発掘は、その華麗な人物群像・四神などの壁画の発見によって、被葬者や朝鮮半島との関係などが論争の的になった。

その後、各地で道路建設・工業団地や住宅建設に伴って、三内丸山遺跡はじめ多くの発掘調査が行われ、今までの常識を覆す貴重な発見が相次ぎ、日本の原始・古代史を書き換えなければならないことになった。日本の先史文化は縄文中期（5500年前）にはすでにかなり高度な域に達していたことが判明したのである。

一方、中国大陸においては、長江（揚子江）中流・下流に9000年前から稲が栽培されていた遺跡が発見され、従来栽培稲は約5000年前に「アッサム・雲南」においてはじめられたというのが通説であったが、この学説は覆され、日本国際文化研究センター梅原猛前所長らは、中国考古学者と共同研究をすることになっている。そして日本の稲栽培も、渡来人（弥生人）によって紀元前３世紀ごろ招来されたという学説も、縄文晩期にはすでに一部の縄文人によって行われていたことが、最近の発掘調査の結果判明するに至った。

以下、日本におけるここ数年の発掘調査の結果を、マスコミの報道（主として中日新聞の記事）を通じ、私見も交えながらまとめることにした。それぞれ末尾の（　）内の数字は報道された年月日を示す。

1.　三内丸山遺跡を頂点に多くの縄文遺跡発見

縄文人は少数の集団で、狩猟・漁撈・採集の生活をし、獲物を追って移動し、動物の毛皮や植物の繊維で作った衣服をまとい、石器・土器・骨角器を使用する狩猟民であったと考えられていた。ところが三内丸山遺跡の発掘調査によって、ここは高度の建築・土木の技術をもち、人口も約 500人で、約1500年に亘って定住した縄文中期のわが国最大の集落跡であることが判明した。この縄文文化は、当時のアジア東北部の諸民族の文化と比較すると一段と高いものをもっていたようで、今までの縄文観を一変させることになった。

北国の三内丸山遺跡・畿内の正楽寺遺跡・西国の上野原遺跡など、日本海側の相次ぐ発見の遺跡は、東京大学の大林太良教授らの提唱する「日本海文化」が、縄文中期には奥羽

地方を中心に栄えていたということを補強したことになった。縄文中期は気候の温暖化と海進により、海山の食料に恵まれて生活に余裕が生まれたのか、豊かな文化を育てている縄文後期・晩期になると、外的な気象条件の悪化により収穫は減少し、人口支持力の大きい稲栽培の魅力にひかれ、新たに渡来した弥生人に逐次同化したようで、縄文晩期の上出遺跡にそれがうかがわれる。

○最古級大型集落が発見の上野原遺跡　縄文早期（約9500年前）

鹿児島県国府市上之段　台地の斜面近くに集落をつくっていた。

この集落は多い時は46棟で、約 230人がかたまって生活をしており、約60年間定住した。貝殻文の土器・石皿など出土し、イノシシやシカの肉を薫製にしたハム・木の実を粉にしてクッキーにした跡もあり、想像以上の豊かな生活であった。（Ｈ９・５・26）

○縄文感を覆した三内丸山遺跡の発掘　縄文前期～中期（約5500～4000年前）

青森県青森市　陸奥湾を見下す丘陵地にある。（Ｈ７・１・30）

発見された建物跡は竪穴住居550棟、高床建物約 100棟、長軸が10メートルを超える竪穴式の建物20棟以上などで、中でも遺跡の北西端で発見された巨大柱建物の、クリ材の柱根の最大直径は 103センチの巨大さであった。

三内丸山遺跡全景

集落全体は計画的につくられ、住居域・倉庫とみられる高床建物群・墓地などが整然とつくられている。

そして約1500年間ここに定住した。多くの住民の食生活を支えるためには大量の食料が必要であり、植物としてはヒョウタン・イヌビエ・クルミなどで、クリを栽培した可能性もあるという。動物としてはシカ・イノシシ・ウサギ。魚類はマグロ・タイ・イワシなどの骨が大量出土したという。なお遺跡からは新潟県産のヒスイ、岩手県産のコハクも出土しており、他地域との交易も盛んでありその中心でもあったようである。

○縄文中期に大規模造成工事の崎山貝塚　縄文中期（約5000年～約4000年前）

岩手県宮古市能登川町　丘陵の上から斜面にかけて地面を削り平地にし、祭祀用の広場をつくる大規模な土木工事が行われていた。

中央広場では立石が埋められ、環状遺構帯は正確な円形で、土壙墓や男性器を模した石棒と石を並べて作った配石構などが出土した。（Ｈ８・９・30）

○三内丸山遺跡と同規模の縄文時代の巨大柱穴出土の宮畑遺跡　縄文中期（約5000年前）

福島県福島市岡島　縄文中期と後期の巨大柱穴がそれぞれ三つ発見された。

柱穴はいずれも直径２メートル深さ 1.8メートルで、柱の直径に相当する柱跡は直径80～90センチあり、二等辺三角形に配列されていた。この巨大柱跡は三内丸山遺跡に次ぐもので、この遺跡は縄文人の世界観を考える上で重要な発見である。(H 10・2・6)

○大集落や環状木柱列が出土の正楽寺遺跡　縄文後期（約3500年前）

滋賀県神崎郡能登川町　住居域・祭広場・食糧の貯蔵穴を発見。土面や土器も出土。

集落には常時30～40人が、 100年以上定住していたと推定されている。また環状木柱列を設定して祭りを行っていたことが、中心の炉跡から推測される。（Ｈ６・11・８）

○四本抜歯の縄文成人発見の堀内貝塚　縄文晩期（約2700年前）

愛知県安城市堀内町　ここからは土壙墓13基・土器棺墓19基が発見されている。

東海地方のこの時代は、成人になると抜歯する習慣があり、結婚後は下の門歯を抜く「４Ｉ型」と左右の犬歯を抜く「２Ｃ型」の二系列に分れていた。これまで２Ｃ型より見つかっていなかった東海地方で、堀内貝塚の再葬墓から四本抜歯の４Ｉ型の縄文人が発見されたことは珍しいことである。（H10・２・６）

○縄文時代の土器棺墓と弥生時代の木棺墓が同時発見の上出（かみで）Ａ遺跡

縄文晩期（約2400年前）　滋賀県蒲生郡安土町中屋（Ｈ９・９・20）

縄文晩期から弥生時代前期後半にかけての木棺墓12基と土器棺墓10基が混在した墓地跡

これは弥生文化が九州から近畿に波及した際に、近江の縄文人が弥生化して行く過程を知る上で重要な発見である。当然ながら稲栽培の可能性のある土地と考えられる。

２．稲栽培と部落国家成立の弥生時代

紀元前３～２世紀ごろ、大陸や朝鮮半島より水稲耕作・機織の技術をもった渡来人（弥生人）が北九州に逐次上陸し、弥生文化は次第に奥羽地方南部まで広まっていった。

弥生土器は、農耕生活の発展につれて貯蔵用のつぼ・炊事用のかめ・食器用の高坏などに分化し、木製や石製の農具の種類も増えてきている。住居は竪穴式が多いが、穀倉は高床式のものも現われ、集落の規模も大きくなってきた。また金属器も使用されるようになり、中国から朝鮮を経て青銅器・鉄器が伝えられ、銅鐸や銅剣・銅戈（どうか）・銅鉾が祭祀に用いられるようになった。

生産が高まり、集団生活が発展すると部落国家が成立した。『漢書』によると紀元前1世紀ごろには西日本は百余国に分かれ、中には漢の植民地であった楽浪郡に定期的に使者を送った国もあり、また『後漢書』によると、紀元57年に倭奴国（わのなのくに）の使者が後漢の都の洛陽に行き、光武帝から印授を与えられたことがみえている。

漢字の伝来はかなり早い時期のようで、帰化人が朝廷の記録や財政にたずさわるようになったのは飛鳥時代のころである。しかし最近発見の三重県片部遺跡・大城遺跡出土の弥生後期の土器に「田」と「奉」と見られる刻書が発見されたことにより、弥生時代後期には文字が一部の人たちによって使用されていたことがわかった。

○木材結合部に高度な技術を使った建築材出土の原の辻遺跡　弥生中期（約2100年前）

長崎県壱岐原の辻

高床式建物の床を支える木材で、両端に別の柱と結合させるための突起（ほぞ）がある。さらに「込み栓」を貫通させる技術のあったことが想定できる。紀元前に高度な技術があったことの画期的な発見である。(H•10•1•14)

原の辻遺跡出土の高床式建物の木材

○盾と戈（か）の弥生戦士を描いた土器出土の清水風遺跡

弥生時代中期後半（1世紀前後）

奈良県磯城郡田原本町

当時の戦士の武装を示す重要な発見である。この土器には胴部上半部を取り巻くように高床式建物1棟・魚4匹・鹿1頭が線刻で描かれている。（H8・9・21）

○船と鹿の珍しい線刻土器出土の小谷赤坂遺跡　弥生時代後期（2世紀ごろ）

三重県一志郡嬉野町天花寺（てんげじ）

竪穴式住居から船と鹿の描かれた線刻土器が出土した。鹿と船の組合わせの土器は珍しく、鳥取県の稲吉角田遺跡の場合は、鹿には「五穀の種を腹の中に入れたら、一晩で実った」という神話があり神聖な動物とされている。現在も長野県その他の古社では豊作を祈って鹿打ち神事が行われている。（H10・3・11）

○「奉」と見られる文字刻書の土器出土の大城遺跡　弥生時代後期（2世紀中頃）

三重県一志郡安濃町

小谷赤坂遺跡出土の船の絵が描かれた土器

この遺跡の中の最大規模の竪穴住居より発見されたもので、そこは祭祀場所と推定されている所である。（H•10•1•7）

○人面の墨書土器出土の貝蔵遺跡

弥生時代後期（3世紀初頭～前半）

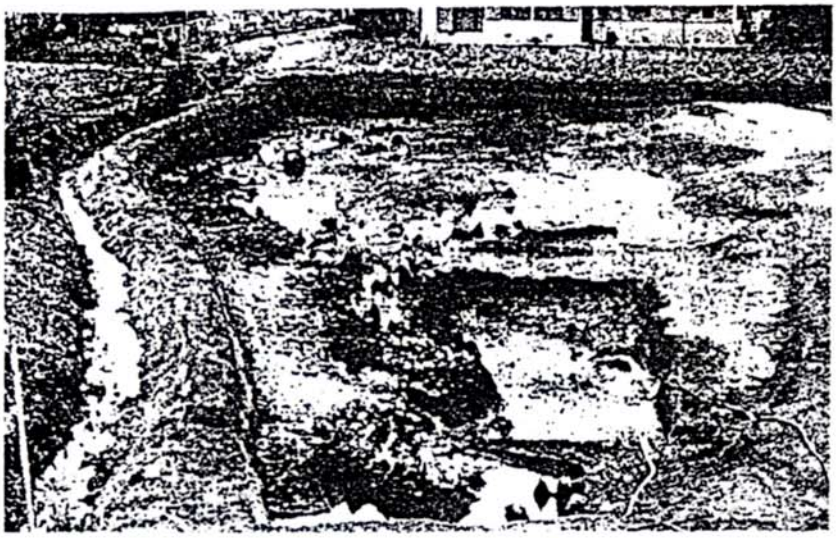
三重県一志郡嬉野町

小型の土師器（はじき）に目鼻・ひげが描かれており、隣接の片部遺跡からは4世紀前半の土器から「田」と見られる土器が発見されるなど、嬉町からは墨書土器の発見が相続いた。弥生時代後期にすでに墨と筆の文化があったことを証明する貴重な資料である。紙のない時代であるので土器に書かれたものであろうか。（H10・3・11）

○日本最古の堤発見の六反田（ろくたんだ）遺跡

弥生時代末～古墳時代（4世紀初頭～中ごろ）

三重県一志郡嬉野町中川



日本最古とみられる4世紀の堤の基礎部分

日本の土木史を300年以上塗り替える発見で、遺構は幅1.5メートル～2.5メートル、長さ25メートルで、直径10センチ程度の河原石を乱雑に敷き詰め、一部には板くいや土留がされていた。同町では3世紀の人面墨書土器、4世紀の「田」とみられる墨書土器に続いての発見で、文字や高度の土木技術を操る渡来人の施工と考えられる。（H10・2・10）

平成９年度の経過

４月　名古屋同気会第四回会員愛蔵品展　会員12名出品点数34点より各自逸品揃の物
５～６月　渡辺義光・焼物収集展　渡辺義光氏の収集したあらゆる焼物のコレクション
７～８月　西高蔵遺跡（五本松町11）　荒木実が昭和60年より行った発掘調査での出土品
９～10月　伊勢山中学校生物クラブＯＢコレクション展　藤正彦氏とOBの研究成果を発表
11～12月　アジアの魅惑の民族衣装と舞踊写真展　近藤宗光氏のコレクション
１～２月　海の生きものと化石　10年にわたって集めた川瀬基弘氏の現生種と化石の標本
３月　「旅の思い出」土鈴展　山田馨氏が旅の中で収集した，各地の土鈴を展示

荒木集成館友の会と「きりん」会誌の規定

・平成９年４月から会費は年3000円とする。
・会員は年６回以上見学会の会合があり、その都度「集成館パンフレット」を配布する。
・「きりん」友の会の会誌は年１回発行する。
・会誌への投稿は会員にかぎる。
・内容については、研究調査、報告、旅行記録等として、文章だけはいけない。図絵・地図・写真等を必ずつける。
・文献を引用したときは、文献名を文末に明記する
・１頁の大きさは、Ｂ５版　横書40字×30行　題名は２行　名前は１行とする。
・１人５頁以内とする。

題字は荒川心壺氏

き　り　ん

第２号

１９９８年５月

発行所　荒木集成館友の会
〒 468-0014 名古屋市天白区中平 5-616
電話　〈052〉 802 - 2531
郵便振替　00860 - 0 - 676